

特集

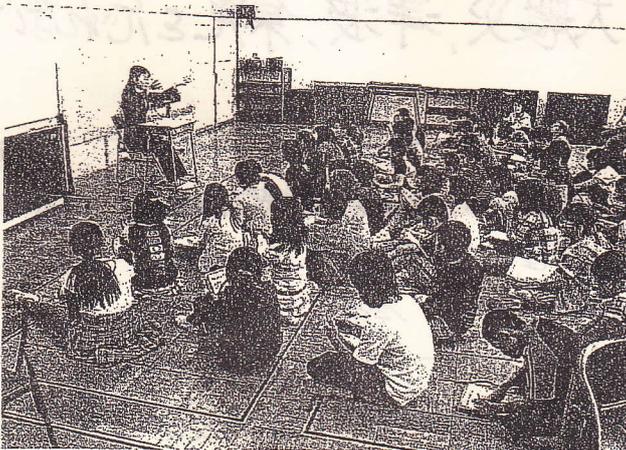
がんばる福島人 ①

笛吹・石和に住む 猪狩さん

<山梨日々新聞>

文化151

福島から避難の猪狩さん 甲府で小学生に体験談



「助け合い」「諦めない心」学ぶ

東日本大震災と原発事故の影響で福島県広野町から避難し、現在笛吹市に住む猪狩明美さん(46)が今月、甲府・里垣小で震災後の暮らしや心境を児童たちに語り始めた。自身の体験から、助け合いの精神や逆境にめげない気持ちの尊さを語り掛けた。「何事も諦めない」家

族、友達を大事にする」。猪狩さんの話を聞いた児童の感想文にはそんな言葉が

「ドスン、ドスンと家が揺れ始めた。揺れがあまりに大きく、はだして庭先に飛び出していた」。左右に揺れるのが家。母屋の扉や瓦がバサバサと崩れ落ち

る。「全く言葉が出なかった」。猪狩さんは昨年3月11日を振り返りながら児童に話していった。

「ドスン、ドスンと家が揺れ始めた。揺れがあまりに大きく、はだして庭先に飛び出していた」。左右に揺れるのが家。母屋の扉や瓦がバサバサと崩れ落ちると避難者がざわついていたという。

4人の子ともと無事に合流し、その日は町の体育館で一夜を過ごした。日中に防寒用の毛布を自宅に取りに帰ったが、体育館に戻る

「母ちゃん、(東京電力福島)第一原発がかなり危ないらしい。みんな南へ逃げろって言うてる」

同14日、県外避難を決断する。「いつまで続くかわからない避難生活。子どもたちの就職、進学、そして健康が心配だった」。情報収集の末行き着いたのが山梨。新たな土地に向かう連転中も涙が止まらなかったが、「子どもたちのために前だけ向いて頑張ろうと思った」と当時の心境を打ち明けた。

見は込合をに、話を聞きた。お礼の言葉を述べた。

「震災と原発事故の経験から、」当たり前だと思っていた生活が当たり前ではなくなると身に染みて感じた。猪狩さんは「体験による話を通じて、子どもたちに助け合いの大事さが伝われば幸い。同時に、風化している印象がある震災について考えを巡らせてもらえたらうれしい」と語った。

は車で30分ほどの距離。長男の言葉に頭が真っ白になり、「この日から私たち家族の行く当てのない避難生活が始まった」と児童に語り掛けた。

真剣に聞き入っていた4年生53人。講演後、猪狩さん宛てに書いた感想文にはさまざまなお返事が書きつけられた。「家族、友人のありがたさを強く感じた。ともに助け合って生きていきたい」「諦めなければ希望が見える」という言葉が心に残った。頑張っていた「あらためて震災の怖さを知った。福島に戻るよ」に応援しています」



震災後の避難生活について語る猪狩明美さん。川いずれも甲府・里垣小

講演を担当した福山薫(40)は「大震災発生から1年半以上たっているが、震災から学ばなければいけないことは多い。子どもたち個々に感じるところがあったらよい」と話した。猪狩さんは「体験による話を通じて、子どもたちに助け合いの大事さが伝われば幸い。同時に、風化している印象がある震災について考えを巡らせてもらえたらうれしい」と語った。

<田中喜博>